

2020年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	デスカフェの実態と効果に関する研究 —多死社会における死を語るコミュニティの役割—
キーワード	①デスカフェ、②多死社会、③死生観

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヨシカワ ナオト 吉川 直人	所属等	京都女子大学 家政学部 助教
プロフィール	社会福祉学・介護福祉学の助教で、デスカフェ研究に力を注ぐ。2018年に青森で初となるデスカフェの立ち上げに関わり、2019年より全国デスカフェのフィールドワークを開始してその多様性に着目、更なる発展とネットワークの構築のため、2020年9月にデスカフェサミットを企画開催した。		

1. 研究の概要

人口減少社会から多死社会へと進む現在、死を語る場、死を探究する場や機会に対するニーズは増加することが予想される。しかし、「死」を語る会や当事者団体、宗教色の強い場に赴くことはハードルが高い。そのため、多様な背景を抱えた人々が死をカジュアルに語り合う場としてデスカフェの実践が広まりを見せている。デスカフェには、多死社会に向けて、死を当たり前のものでとらえ、死への受容と寛容さを身につけ、死を語ることのタブー視からの解放の役割を果たすことが期待されている。しかし、手探りの実践のため、多様な実施主体がそれぞれの問題意識のもとで行っている。死をカジュアルに語る場に対するニーズとそれに見合った場や頻度についても、バランスが取れていない現状である。

今回の研究は、各地のデスカフェのフィールドワーク、運営者に対するインタビュー調査を行い、得られたデータをもとに、デスカフェの実態と効果の調査研究を行う。上記の調査により、デスカフェの実態と課題、死を語り生に向き合う場の形成が、多死社会にもたらす効果とさらなる発展のために必要なアプローチを明らかにする。

2. 研究の動機、目的

多死社会における課題として、増加する「死」への物理的、心理的な対応の困難があげられる。死を迎える際の心構え、死を迎える場所、送られ方、残された者のケアといった、死に関する課題が増加することが予想される。多死社会による変化として、葬儀の変化（直葬等） 看取りの変化等がある。死を取り巻く状況の変化に伴い、死に対する価値観、死生観も変化が予想される。いままでの悼み方、受容の仕方（悲しむ、葬送の儀式を行う、受け入れる）といった（ゆっくりと段階を踏んだ）受け入れ方が、死の増加に伴う物理的な影響の波及効果として難しくなる場合も出てくることが考えられる。多死社会に対する備えとして、専門職の行う医療、看護や看取り、葬送といった課題に関しては研究が進んでいるが、死を語るコミュニティ、専門職のみに頼らない市民の自主的な試みについては実践及び研究が進んでいない。

死を語るコミュニティのもたらす意義と効果を広めるために、既存のデスカフェ及び新規のデスカフェ開催のためのデスカフェのネットワーク化を行い、さらなる発展を目指す研究を行う。

3. 研究の結果

デスカフェは、ケアの機能、探求の機能、コミュニティの機能、ネットワークの機能、死への準備教育の機能を有し、日本では、海外の実践を参考としながら、独自に様々な形で発展している。国内では、2020年2月のコロナ禍以降、デスカフェの多くは、対面からオンラインに移して実施されている。コロナによる死は、亡くなった人に会えず、葬送の場も縮小されてお別れもできないだけでなく、依然として死につながる感染症として蔓延していることから、自らの死生観を揺さぶられ、死について語りたいたい需要が増している状況にある。しかし、デスカフェがどのように広がり発展しているのか、実態をつかむ研究が少ない。その上、オンラインで開催されるようになり、どのような変化が生じているのか未解明である。そこで、国内デスカフェの実態調査を行い、発展過程を明らかにする。

実施したフィールドワークにより、国内のデスカフェはいくつかの段階を経ながら、多様な形態で発展していることが確認された。2014年頃から、deathcafe.comのガイドライン等を参考に国内でのデスカフェ第一世代の実践が各地で開始された。この時期に単発や数回で活動を終えたデスカフェもあるが、現在まで継続した実践を行っているところも少なくない。2016年頃から、第一世代の実践をマスメディア、SNS等で知り、それぞれ多様なアレンジを組み入れたデスカフェが登場してきた。2020年からは、コロナショックによる対面デスカフェの中止、オンラインデスカフェの勃興、デスカフェサミットを経て新たな段階に向かう過渡期である。

デスカフェ開催者のインタビュー調査の結果から、開催者の専門性や死へのかかわりから語られたデスカフェの継続要因と今後のコミュニティとしての可能性を分析した結果、「求められている場づくり」「開催者自らの成長」「新たなネットワークコミュニティ」の11のコード、3つのカテゴリーが抽出された。以下に、カテゴリー「」、コード〈〉で表記する。

1「求められている場づくり」

デスカフェ開催者は、死を語る場を開く際の留意点等を意識していた。対話の場であるが強制されずに、何を話しても受け入れてくれる安心感を持てる〈安心・安全な場〉であることを特に大事にしていた。開催者も自分から〈自己開示〉を行うことにより、対話が円滑に進むように工夫を行っていた。デスカフェが癒しの機能や探求の機能を発揮できるように、人は必ず死ぬという当たり前のことを時間をかけて深く見詰め、死を存分に〈悲しむことが出来る場〉とすることで、心の奥にある思いを語れる空気を作り出している。参加者が深い所で話しているときは、口を挟まずだれかが話して上書きされないように気をつけ、〈一段深い対話〉に落とせるように意識した実践を行っていた。

2「開催者自らの成長」

デスカフェは、参加者のみに影響を与えるわけではなく、開催者にも影響を与えていた。制度的担保がなく行政の補助があるわけでもないため、開催者のモチベーションが続かないと継続は出来ない。デスカフェは、自分がよく生きるための〈自らの生の場〉であり、参加者の死生観を知ることからの気づきや知識の修得も多く、〈自らの学びの場〉となって「開催者自らの成長」につながっていた。また、自らも話を聞いてもらうことで〈自らの癒しの場〉にもなり、参加者、開催者の双方向に好影響があることが大きな継続要因となっていた。

3「新たなネットワークコミュニティ」

デスカフェは、死へのどのような思いも受け入れられる場所、聞いてもらえる場所である。〈死生観で集まる場〉は、自然とお互いを否定することなく、多様な人が認め合いながらつながら、〈死のテーマを媒介としたコミュニティ〉になっていくことを多くの開催者が感じていた。さらにオンラインでの開催になれば、リアルなコミュニケーションが苦手な人も、顔を出さずに写真だけ映し出すなどの方法で参加して、発言が出来る。このようなネットの中で生きている人ともつながり、コミュニティの寛容性が広がるという開催者もいた。

国内デスカフェの実態調査の結果、多様な形態による発展は、主催者が持つ専門性(病院、施設、寺院、葬儀社、セラピスト等)によって開催形態の工夫を行われており、CP、グリーフケア、死の探求、自分の死について考えてみたい等のさまざまなニーズに対して適応していた。

オンラインに移したデスカフェが発揮している機能として、リアルな場で行っていた

多様な形態をオンライン上で再現が出来、ケア、探求、コミュニティ、ネットワーク、死への準備教育のすべての機能を継続していたが、特にオンラインの特性により、コミュニティの機能が強化されていた。

今後の連携や協働などを通じて、デスカフェ主催者たちはコミュニティ形成の場としての意識を持って実践を続けており、死のテーマを媒介とした新たなネットワークが形成されつつある可能性が示唆された。

4. 研究者としてのこれからの展望

本奨励金の研究で得られた結果をもとに、死を語る場のもたらす意義と効果について研究を進めていきたい。研究者として、地域住民として、多死社会の課題に真摯に向き合い、今後とも取り組み、安心して生きることのできる社会につながるような研究成果を重ねていきたい。

5. 社会（寄付者）に対するメッセージ

この度は、貴重な奨励金をいただき、誠にありがとうございました。皆様のご支援により、深まる多死社会において必要性を増す、死の対話の場の意義、価値、効果とさらなる可能性の拡大、ネットワーク化の糸口を図るという目的を果たすことができました。

本研究の遂行にあたり、ご支援いただいた皆様に、深く感謝の意を表します。